第２章－２　令和元年度　保幼こ小連携・接続研修

１　「育ちと学びがつながる幼児教育と小学校教育」

講師：鳴門教育大学附属幼稚園長　鳴門教育大学大学院　佐々木 晃　教授

実施日：令和元年６月 11 日　会場：福島区民センター

(1) 研修の主な内容

① 幼児期の教育

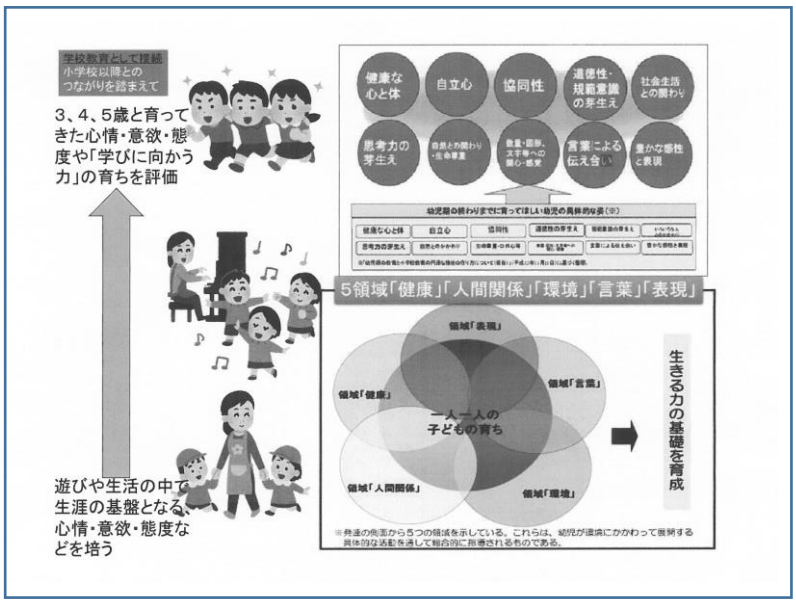
幼児期は、遊びを通して、動きながら学ぶ、真似っこして学ぶ。環境と関わることを通して、周りの物事に対処し、人々と交渉する際の基本的な枠組みとなる事柄についての概念を形成する。また、人と関わることによって、やってよいことや悪いことの基本的な区別ができるようになる。このように、体験をもとに学んでいく時期で、個人差も大きい。幼児教育は、教科書のない教育である。

幼児教育の重要性は、ヘックマン教授たちの研究等で実証された。「真面目さ、粘り強さ、自制心、忍耐力、気概、首尾一貫性」のような信頼できる人間性の涵養につながる就学前の幼児教育が重要である。

② 保育所保育指針・幼稚園教育要領等、３法令の改訂のポイント

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10 の姿〕には、非認知能力（学びに向かう力）と認知能力がある。

５領域の経験を通して育った幼児の具体的な姿を、〔10 の姿〕として可視化を図り共有することで、小学校教育へつなげるものである。



（パワーポイント資料より）

幼児教育は、環境を通して何を経験するのか、それで何が育ったのか、資質・能力の成長を見ていく。長い道筋で連携して子どもを育てていかなければいけない。

③ 連携から接続へ

「遊び」は「学習」の基盤である。大事なことは、子どもがどんな経験をしているかということ。遊びを通して科学的な思考が身に付いていく。

就学前施設は幼児期の教育を深く捉え、それ以降の教育との関係をつかむ。小学校は育ってきた過程を理解し、育ちを積み上げていく。「接続」のために「連携」していくことが大事。

④ 言葉について

乳幼児期から「育ち」や「学び」はつながっている。

言葉は、人間として最も重要な行動だが、表に現れた言葉は氷山の一角に過ぎない。言葉にならない言葉こそが大事。

赤ちゃんが、「おかあさん」という意味で母親を呼ぶ時は、指し示す母親の存在が認識されている。母親の表情や服装など、目に映る知覚像は変化しても、一つのもの、同じものとして認める認識の枠組みができている。

また、言葉が育ってくると文字へのあこがれが出てくる。３歳児が、グルグルともつれた毛糸のような線を描き、「かんじ（漢字）かいたもん」と嬉しそうに言う。

文字へのあこがれは、成長の実感とも関わっており、魅力ある社会への入口である。自分や友達の名前の文字を探して遊ぶ体験、そして、いろいろなものに名前がある、音があることを知る。繰り返し読んでもらう絵本から語句の意味を感じ、手紙等文字によって思いが届くことを知る。

幼児期は、遊びを通して言葉が身に付いていく。保育を通じて、音声言語を中心とする一次的言葉から、文字をはじめとする二次的言葉へと、言葉を育てていく。幼児期は、一次的言葉と二次的言葉の併用の中で試行錯誤を体験し、言葉を豊かに扱うようになる。

今までの連携は、家庭保育、保育所保育、幼稚園教育がそれぞれの独自性を明確にして発信していた。これからは、独自性を大切にしながらも、一貫性のある教育を行い、18 歳までどうつなげていくか、それが柱になる。幼児教育が小学校につながっていく。日常行っている遊びが小学校の何につながっていくのか、小学校の先生と共有しながら、子ども一人ひとりの学びを見つめ進めていくことが大事である。それがこれからの連携・接続となるということを学ぶことができた。

(2) 研修後のアンケートから　（参加人数　149 人）

○理解できたか　　肯定的回答　96 ％
○知識の獲得はあったか　　肯定的回答　98 ％
○活用できるか　　肯定的回答　99 ％
○感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕

・自分たちの行っている保育について共感することばかりだった。同時に幼児期に積み残したものを自分たちの反省で終わらせるのではなく、小学校にバトンをつなげ、どう寄り添っていくのか、佐々木先生の言葉通りシェアしていける場を多くもちたいと思った。
・小学校への接続の必要性を重く感じた。この学びが小学校のどこにつながるのか、就学前に何を大事にするのか意識することができた。遊びの中の学びをもっと見ていこうと思った。
・総合的な遊びの中での学びをどう保障していくかが大事だと分かった。しっかり振り返り、環境構成をしていきたい。
・小学校の研修では聞くことができない幼児教育について教えていただき興味深かった。１年生がどうしてあのようなことを言うのか、するのかが分かった。領域と教科の違いも分かった。(小)
・小学校教育で必要なことが、幼児教育の育ちと学びの中にあることを具体的に聞けてよかった。保・幼～小～中～高の接続の必要性を強く感じた。(小)

２　「資質・能力を育むための保育方法・保育環境の視点から幼小接続を考える」

講師：大阪総合保育大学　瀧川 光治　教授

実施日：令和元年８月１日　会場：東成区民センター

(1) 研修の主な内容

Part１「接続期／円滑な接続」のもつ意味

2015 年１月「スタートカリキュラム　スタートブック」(文部科学省・国立教育政策研究所）が各自治体（教育委員会）に配布された。小学校がゼロスタートではないことが強調され、その意義として

・安心― 子どもに安心感が生まれる（幼児教育の考え方）
・成長― 子どもが自信をもち成長する
　　（幼児期の経験を学習活動につなぐ）
・自立― 子どもの自立につながる
　　（スタートカリキュラムを入口として６年間を見通す）

が示されている。

円滑な接続のために、幼児期においては、主体的な活動を通して資質・能力を育むことが大切であり、それは「環境を通して行うこと」を基本とする。また、小学校では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10 の姿〕を接続期の子どもの姿として就学前施設と共有し、生活科における体験を基盤とした学習を通して“見方・考え方”を働かせ、資質・能力を育むことが重要である。

Part２　幼児期の教育で大切にしたいこと

「創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎」を育む保育のためには、子どもが保育環境や遊び方等をアレンジしながら「自分で遊びを創り出す」ことが大切であり、「楽しんで、夢中になって遊ぶ」中で、創造的な思考や主体的な生活態度が育まれていく。

そのためには、保育者が子どもの遊びや活動を理解する、つまり一人ひとりを“あたたかいまなざし”で丁寧に見ることが必要とされる。

子ども理解の視点として、

①　「資質・能力」の〔３つの柱〕で、子どもの姿を内面から具体的に捉える
②　〔10 の姿〕で、子どもの育ち・経験を理解していく

ことが挙げられる。

【グループワーク】(各グループの５～６人の参加者　　準備物―ストロー、綿棒)
“ストローで綿棒を飛ばして遊んでみよう！”
個人で、またはグループで、いろいろな遊びをした後、どんな遊び方があるか、その中でどんなことに気付いたか、遊びを通して何を学んだか、そして、この遊びを子どもたちがするとしたら、どんなふうに遊びを発展させていくか、各グループで話し合う。

子どもの創造的な思考を育むためには、今ある環境を用意して終わりではなく、子どもたちの気付き・発見を促すための環境を用意することが大事である。(環境の再構成)

【ワーク】ビデオ「色付きつやつや泥団子」から考える
ビデオを見て、感じたこと、思ったことを話し合う。この活動を通して、何を育てたいのか、そのためにどんな方法や配慮を行っているか、実際の子どもの姿や視点から話し合う。

Part３　資質・能力を育むための保育方法・保育環境

資質・能力を育む保育のあり方とは、子どもが体験することが大事なのではなく、体験したことを通して何を育てたいのか、そのためにはどのような関わりが必要なのかを考えることが大切である。成功体験だけではなく、うまくいかない経験が学びになる。

深い学びのためには、子どもにとって試行錯誤の経験が大事で、子どもたちの気付き・発見を促すための保育とはどういうものか、そこに目を向け、意識的に育てていこうとしなければならない。

【ワーク】「クーゲルバーン（ビー玉の転がる道づくり）」「カプラ（木製ブロック）」で遊ぶ写真を見て、子どもたちはどんなことを感じたり、気付いたり、試したり、考えたり、工夫したりするのか、資質・能力の視点で考えてみる。

※　幼児教育においては、物的環境に関わる中で、子どもの資質・能力が育まれる。子どもたちは、どんなことに気付き、その中で育まれた力は何につながっていくのか。子どもは、何かに取り組み、問題が発生した時、ああしよう、こうしようと知恵を働かせて解決しようとする。そういった問題解決能力が小学校以降の学習にもつながっていく。

保育者はそのような見通しをもち、保育の展開や環境構成を行っていくことが大切である。

(2) 研修後のアンケートから　（参加人数　78 人）

○理解できたか　　肯定的回答　97 %
○知識の獲得はあったか　　肯定的回答　97 %
○活用できるか　　肯定的回答　94 %
○感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕

・ワークショップをすることで、グループの各自が別の視点をもっていることや共感できる部分があることが分かった。保育者の関わり方によって、子どもの資質・能力の育まれ方が違うことを学び、子どもの「面白い」「なぜ？」「どうしよう」を大切に実践していきたい。
・資質・能力を育むための実践をいろいろ示していただき、分かりやすかった。日々、子どもたちの学びが深まるような保育環境、何を育みたいかを意識して保育に取り組んでいかなければと思った。
・算数、理科で特に問題解決学習をするが、幼児期にもそのような経験があるとは知らなかった。学びの基礎が幼児期に培われていることがよく分かった。(小)
・子どもの気付きや主体性を育てるには、就学前施設と小学校が育ちの連続性を共有することが大事である。(小)

３　「幼児期の教育と小学校教育の連携・接続の推進について」

講師：奈良教育大学　横山 真貴子　教授

実施日：令和元年 11 月 15 日　会場：保育・幼児教育センター

(1)　研修の主な内容

① 新しい要領・指針における幼小接続の推進

改訂の３つのポイントは、①社会の変化と育成をめざす「資質・能力」、②「資質・能力」でつなぐ、③「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」でつなぐ、ということである。

自動化が進む中、AI やロボットによる自動化が難しい職業の特徴として、創造的思考（目的意識に沿って方向性や解を提示する能力）・社会的知性（自分と異なる他者と協力できる能力）・非定型（自分自身で何が適切であるか判断できる能力）が挙げられる。これは非認知能力的な部分にあたる。急激な社会の変化の中でも、未来の創り手となれる資質・能力が大事になる。

育成すべき資質・能力の３つの柱は、①知識及び技能の基礎、②思考力、判断力、表現力等の基礎、③学びに向かう力、人間性等。この３つの柱で、幼小中高、ずっとつながり積み重ねていく。そして、その中で幼児期にしておきたいことは、豊かな経験を通して気付いたり分かったりできるようになる、その力を使って試したり工夫したりする、やりたいことに向けて粘り強く取り組む、ことである。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10 の姿〕を踏まえて、スタートカリキュラムを作っていく。すべての教科のキーワードとして〔10 の姿〕が入っている。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、その姿に向かって進みつつある姿、プロセスとして捉える。「ここが育ち足りない」ではなく「こう育ってきた」と言うように、伸びようとする姿を見ていく。足し算で見ていく、伸びていく指導の方向性として見ていくものである。

② 幼児教育と小学校教育の接続に向けて

激動する社会変化に伴い、「学び続ける」ことが求められる。校種間がつながり先取り・準備ではなく、その時にしか学べないことを学ぶ。幼児教育はその土台となる部分である。

連携から接続への内容として、子ども同士の交流、教師（保育者）同士の交流、カリキュラムの接続があげられる。

連携・接続に着手できていないところは、なぜできていないのか、どうしたいのか考え、できることから始める。知ることも第一歩になる。

できているところは、何ができてきたのか、それを深めるために次の取組を考えつなげていく。交流から接続を見通した教育課程の編成・実施、そして、実践結果の検討・課題共有をし、保幼こ小連携・接続のステップアップをしていく。教育課程や接続期のカリキュムを見直していく。

どうすればステップアップできるか、自校園所のことを振り返りながら進めていくことが大事である。

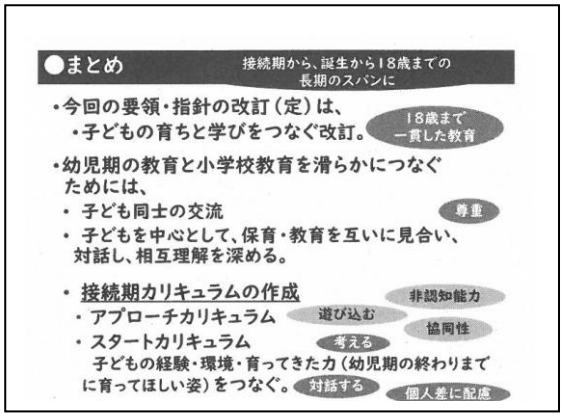
【グループワーク】幼小連携・接続の工夫を共有しよう！

（６人のグループで、幼小連携・接続について自園所校で取り組んでいる実践や取組の工夫について交流し、グループ内の内容や特徴を共有していく。）

・年長児と１年生の交流、年長児の学校体験、小学校教師の保育体験、地域主催行事への参加、高校生との交流等、各校園所の工夫を知ることができた。
・施設の雰囲気を知ることも連携の一歩、プラス意識で捉えていく。対外だけでなく自園所の中でのつながりやステップを踏んでいくことの大事さも分かった。

③　**接続期カリキュラムの実施へ**（他都市や大阪市立小学校の取組を交えながら）

幼児教育における遊び（学びの芽生え）から、小学校教育の教科学習（自覚的な学び）へカリキュラムをつないでいく。低学年の学びに幼児期の体験・学びをつないでいく。何が大切なのか、幼児期に大事にしたいものは何かを考え、小学校につないでいく。生まれた時から 18 歳までつないでいく、生きていくためにどんな力をつけていくのかを考えなければいけない。



（パワーポイント資料より）

⑵ 研修後のアンケートから　（参加人数　66 人）

○理解できたか　　肯定的回答　98 ％
○知識の獲得はあったか　　肯定的回答　98 ％
○活用できるか　　肯定的回答　97 ％
○感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕

・０歳からの積み重ね、その取組が小中高すべてにつながっていく。生まれた時から子どもの育ちと学びのプロセスを長いスパンで考えることが分かった。
・〔10 の姿〕がゴールではなく、ここまで育ってきたというプラスで考えていくという話があり、保育士も教師も同じ思いで子どもたちを見ていけたらいいなあと思った。
・たくさん遊び、発見し、考え、やってみて、失敗し…という豊かな日々を積み重ねていくことで自ら解決する力を育てていきたいと改めて思った。
・「その時期にやれる経験をする！」ということが心に残った。
・社会の変化の中で生きていける子どもとして、学び続ける力をもつ、資質・能力を育むことの大切さや子どもが困らないように保幼こ小中高が連携していくことの大切さを学び、実践したいと思った。
・様々な取組と情報を交換しつつ、円滑な接続を目指していけばいいと思った。
災害面でのつながりも大切だと感じ、合同避難訓練も必要になってくると思った。(小)
・グループ交流で、保・幼の先生からたくさんの質問があった。小学校の内容を知ってもらうことでより接続がスムーズになればいいと思う。(小)

４　「幼児や児童の声から不公平についておとなも考えなおす
～片付け場面といじめ場面における公平と正義～　」

講師：大阪教育大学　戸田 有一　教授

実施日：令和元年 11 月 22 日　会場：東成区民センター

(1)　研修の主な内容

・子どもたちは何を不公平と思うのか。例えば、

３年生…掃除をしている人としていない人の差。なぜならみんなで掃除をするべきだから。

５年生…自分ならいいが人はダメ、あるいは人はいいけれど自分は嫌だ、は不公平。

おとなの言動を含め、ルールの適用が自分と他人で違っていることに、かなり敏感。

・アクティブラーニング、子どもが学ぶ「力」について

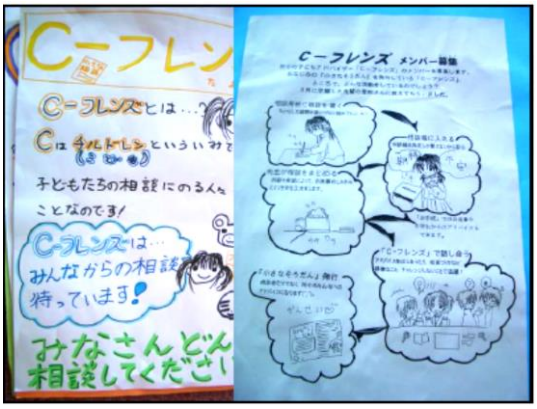
～子どもたちの主体的な学び、友達とつながる社会的な学び～

日本の学校制度では、一人ひとりの理解度や発達のスピードが違う同年齢の子どもたちが同じ学年に所属している。そのような差がある中で、子どもたちは様々な「力」を主体的に、望んで身に付けている。これらの「力」は、幸せになるためには、あった方がいい。

子どもたちは友達と過ごす中で「力」を付けていくが、「力」の度合いが一人ひとり違う。それぞれのもつ力を「支配（いじめ）」に使うのか、「支援（サポート）」に使うのかで、全くその後が違ってくる。小学校の道徳の時間などでは、ある意味、「力の使い方」を教えている。その基礎がためを就学前の段階で始めている。自分だけが「力」があることが幸せなのではなく、それを誰かのために使うことが幸せ。実践者は深く子どもを理解し、「支援」と「支配」の微妙な差異を鋭く見抜き、子どもを支える必要がある。

◇鳥取大学附属小・中学校での紙上相談ピアサポート（子どもが子どもを支える）実践より

（個人が特定されない状態で、子どもが子どもの相談にのる、支える活動）



この実践を行う目的の一つは「相談することの良さ」を子どもたちに伝えること。相談された人が人の気持ちを理解する。相談・問題に対し「自分がされたらどう思う？」と考える機会を与える。また、幼児期からのけんかやトラブルの仲裁をする際に、ただ単に、「ごめんね」「いいよ」をさせるだけだと、「ほんね」と「たてまえ」が分かれ、やがて、いじめも陰湿なやり方になる。やる子とやられる子、どちらにも言い分がある。それを先生のペースで解決すると、もやもや感が子どもに残る。子どもの気持ちの鎮まりや論理的な納得をじっくり「待つ」対応が大事。また、特定の場面だけで行動を変えさせても、違う場面で似たようなことをしている場合がある。その背景をしっかりとらえ、「嫌なことは嫌と言っていい」と小さい時から伝えていくことが、いじめ防止にも虐待防止にもつながる（児童虐待の防止等に関する法律では、第五条に「学校及び児童福祉施設は、児童及び保護者に対して、児童虐待の防止のための教育又は啓発に努めなければならない」とある）。

・カウンセラーは泥沼にいる相談者と一緒に泥沼に入るが溺れない。中学生も、実は、インフォーマルな相談をし合っているが、その中で、泥沼に入らずに指示したり、相談者と一緒に泥沼に入って溺れてしまったりすることがある。極端な場合、「死にたい」という相談に対し「一緒に死んであげる」といった深刻な結果になってしまう。この実践のかくれた大きな目的が、重い深刻な相談は「信頼できるおとなにもっていく」ということを教えること。優しさを発揮する場面を準備するためではあるが、そのために共に倒れないための活動なのである。
・現在、低学年でのいじめの認知件数が一番多い（20 年前は４，５，６年生）。いじめの芽も積極的に認知しカウントするようになった。それとは別に重大事態をカウントしている。いざこざを含め小さなことを積極的に拾って対処し、重大事態（不登校や心身への重大な被害など）を防いでいく。その際、子どもの心が見えていないと表面的に繕ってしまう。いい加減に仲直りをしてしまうと道徳不活性化がおこり、先生の見えないところでやってしまう。

～いじめ防止の授業での小学生の言葉より～

「いじめられっ子の味方になることは、いじめっ子の敵になることではない。」
授業の振り返りのなかで、こういった言葉を書く子どもたちが活躍することで世界が変わる。「自分がやられたから、仕返しするのではなく、だれもやられないようにする」と言う子。反いじめっ子ではなく反いじめの考えが語られる。このような子どもたちを支え、活躍の場を整えるのが私たちの仕事。子どもたちの中には始めから偉大な考えをする子がいる。幼児期においてもすでに相手が常に損をしないように考える他者貢献の子がいる。発達なのか、タイプなのか、なぜどういうところで変わるのかは分かっていない。

素晴らしい子どもたちがたくさんいる。その子どもたちが活躍するために私たちはどうしたらいいのか、子どもたちがこの素晴らしさをもったまま、おとなになるにはどうしたらいいのか、そういう保育、教育における問いの立て方もしなくてはいけない。

(2) 研修後のアンケートから　（参加人数　63 人）

○理解できたか　　肯定的回答　約　95%
○知識の獲得はあったか　肯定的回答　約　95%
○活用できるか　　肯定的回答　約　97%
○感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕
・就学前施設で、いじめとは思っていなかったが保育者の対応や仲裁しだいでいじめにつながっていく可能性があることを感じた。幼児期の子どものトラブルの仲立ちの大切さを改めて感じた。
・相手の気持ちを知る、自分の本当の気持ちを伝えるなど、日々の忙しさに丁寧に関わることができていないことを反省し、仲立ち、仲裁の時は気持ちの成長につながるチャンスと思い取り組んでいきたい。
・保育所での子どもへの対応を丁寧にすることが小学校の子どもの姿につながっていく。
・実際に子どもの言った具体的な言葉などを聞き、分かりやすく理解できた。(小)
・道徳心を育てることは、教科書や指導書に載っておらず、一筋縄ではないことを改めて知った。日々の小さなやり取りなどの積み重ねから育っていくと感じた。(小)

５　「学びの連続性と円滑な接続　～子どもとの向き合い方～」

講師：東大阪大学　学長代行副学長　吉岡 眞知子　教授

実施日：令和元年 12 月９日　会場：保育・幼児教育センター

(1) 研修の主な内容

①私が、保幼小接続に関心を抱き研究するきっかけになったのは

小学校教員として８年目の時に、２回目の１年生を担任した。１年生の担任をするに当たり、「教育のスタートである」と思い、しっかりやろうと張り切っていた。入学式の日に、M児の保護者から入学式に「外で遊ぶばかりの子どもで、机の前に座らない状況、ほとんど字が書けず、心配」と相談を受けた。国語の文字指導では、M児が嫌にならないように丁寧に寄り添いながら反復練習をしていった。夏休みの絵日記の宿題では「まず絵をかいて、話をしてそのつぶやきを書ける範囲で書くように」と母親にお願いをした。夏休みを終えM児はほぼ平仮名が書けるようになっていた。

２学期に入り、「せんせいあのね」の短作文が始まった。M児の書いてくる「あのね帳」は読んでいると毎日楽しくなってくるものであった。周囲の物事を感じる心やそれらを言葉で表す力がM児は豊かに育っていることを実感した。そのような力が育つ就学前の教育って何だろうと思った。それが、就学前教育を研究するきっかけとなった。

小学校での教科の基礎が就学前教育の遊びの中に全て詰まっており、人間の原点になるものがある。小学校が教育のスタートではなく、就学前の教育とどうつながって、どう活かされていくのかを理解し、広い視野で人間を見ていくことが大事である。

②接続の実態と社会の課題

20 年前に、保育所・幼稚園・小学校の接続の実態を調査した。幼稚園・保育所・小学校のいずれも「連携・接続」は大事と思っているが時間がなくできない、連絡会をしても「互いの愚痴になっている」ということ等、当時から課題として出ていた。これまでにも、子どもをめぐる課題が十分に議論されることなく課題となり、現場の教師たちを多忙にさせている。接続に関することも、互いの子どもの育ちを問う余裕がない。教育の課題をどう整理して現場がやっていくのかが大切である。

③「保・幼・小接続問題」についての現場からの声

本年度、実施した教員免許更新講座での保育士や幼稚園教諭の受講後の感想

- 小学校へは、幼稚園、こども園、保育園、公立、私立の違いがあり、様々な環境の違いがある中で入学してくる子どもたちなので大変だと思う。だから話し合いが必要と感じる。
- 自分自身が保育の先が見えていないことを改めて感じた。小学校の先生方と、もっと話し合いたいと感じた。
- 「接続」ということに対して保、幼、小での温度差があり、互いが互いの置かれている状況やしがらみを取り払うことができ、互いを理解し合えることができれば、子ども理解につながると感じた。　…等々。

地域の方々から子育て相談を受けている中で、ある保護者からの相談内容

幼稚園に喜んで行っていたが、小学校へ入学したら登校することを嫌がり、毎日、校門まで送るようになった。よくよく聞くと、５月の連休明けから始まった運動会の練習を見る機会があり、高学年を指導している先生の姿を見た。それが怖い、学校＝怖いと思うようになった。自分が叱られているわけではないのに。

高学年であっても、就学前であっても叱るのには技術が必要であり、互いに意識し、配慮することが大切である。一人ひとりの子どもを受容し、寄り添って援助することが教師の指導力である。

④保・幼・小接続の課題

子どもの人生に付き合っていくことが教育である。それぞれの子どもを理解していくこと、子どもの育っていく道筋を理解し、その子どもに寄り添っていくことが教師の大きな役割である。

就学前施設の先生方は小学校の子どもの育ちを知ること、小学校の先生方は就学前の子どもの育ちを知ること、そして、教師が接続という意味での指導観を互いに語り合うこと、一人ひとりの子どもの育つ過程をしっかり見ていくことが大切である。

今、「接続」が取り上げられ、話題となっている時だからこそ、私たち大人が子どもの育とうとする権利を守らなければならない。

(2) 研修後のアンケートから　（参加人数　63 人）

○理解できたか　　肯定的回答　約　97 ％

○知識の獲得はあったか　　肯定的回答　約　98 ％

○活用できるか　　肯定的回答　約　98 ％

○感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕

・これまで、自分の意識では小学校とつながっているけれど、どこか別物という感じがしていた。話を聞き改めてしっかり連携を取っていくことが子どもにとって必要だと感じた。

・見えることでだけでなく、一人ひとりをよく見つめ寄り添っていく大切さを知ることができた。「社会で生きていく力をつける」ということに関わる仕事をしているということを忘れずに明日からも頑張りたい。

・接続とは５歳児と１年生のものと考えていた。その子どもの人生をトータルで考え、つなげていくことが接続であることを知り、保育所での育ちの一つ一つが大切であり、それを小学校の先生に伝えて、その子どもを理解してもらえたら良いと思った。

・乳児保育だと、接続は遠い話と思っていたが話を聞き、お互いの現場を理解できるようになればと思う。日々の保育の中に全て教科につながっているのは確かにそうだと思った。

・これまで小と保幼こを結ぶのが連携・接続と考え入学をスムーズにするというイメージだったが、その子どもの育ちを知るということが連携・接続ということだと学んだ。(小)

・地域の幼小中高から支援依頼で訪問し、助言をしている。今後の支援や指導に心にとめておく必要がある内容だった。就学前の幼保に情報の聞き取りをする際の大切な視点を学ぶことができた。(支援学校小)

６　「諸感覚を働かせた自然理解から　子どもの学び・育ちの連続性を考える」

講師：兵庫教育大学教授　溝邊 和成　教授

実施日：令和２年２月 14 日　会場：保育・幼児教育センター

(1) 研修の主な内容

①諸感覚、表現について

幼児期から児童期へと移行する学びや育ちの過程において、「自然」へのアプローチは、必要かつ重要であると考えられる。実際に子ども達は、諸感覚を使って「自然」を認知していく。すなわち体に備えている感覚器官（目、耳、鼻、舌、手など）を働かせ、諸感覚（視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚など）として受容していることが分かる。また、それら受け止めの形式を、「子どもの表現」と捉える。この表現には、周知のように様々なバリエーションが考えられるが、今回は主として造形表現：描画（絵）と言語表現に注目した。

②【 音 】をどう表すか

「楽しい音」「大きな音」「高い音」などに対してどのような表現が見られるか・・・「大きい」など形容詞が付く音：12 項目について調べたところ、次のようなある一定した特徴が見られた（表１）。すなわち「形」は、自分の感情とマッチングしながら表現しており、「色」は大きい、楽しい、高いなどは、赤っぽく、その逆は青っぽい。共通・共有している。また、音を表現するとき、顔の「表情」を入れていることが多く、描く「線」は、ほとんど波線、曲線で表している。もちろん、「言葉」は全てオノマトペで表されている。乳幼児期から理解し合える共通語を使用。

表１　音に対する表現（最も多かった表現）

	楽しい	大きい	驚く	怖い	高い	静か	落ち着く	うるさい	爽やか	小さい	変な	嫌な
形	○	○		○	□	○	○		○	○		
色	黄	赤	赤	紫	橙	黄緑	緑	赤	黄・黄緑	青	紫	黒
表情												
線	～			～		～	～		～	～	～	～
言葉	らんらんらん	どーん・ばーん	ばーん	ひゅー	きーん・ぴー	しー	しーん	ばーん・じゃーん	さー	ひゅー	ぷわん	ぎゃー

③【糸電話】【たいこ】から伝わる音

糸電話で遊んだ経験から、音の大きさをどのように表現するのか確かめてみた結果、色、折れ線、線の太さで表現する子どもが多かった。また、「糸がたるんだら、どうなるだろう？」という質問に対して、音には重さがあって、たるむことで音が下降し、再び上昇する際に、力が必要となり、勢いが足りないため音が小さくなるという「音の力減少説」を唱え、実験してみる子どもが多くいた。そして単に言いっ放しだけではなく、自分の立てた仮説が正しいかどうかを検証していく。まちがっていると気が付くと、その考えをどんどん変え、また確かめていく。その短い繰り返し（探究）が、幼児期の遊びの中にも起きていると言える。

次に、たいこの音の広がりを表現してみた。すると、図１の絵のように、音が耳にだけでなく体全体に響くことから、音は広がりを持っていることに気がついている。5 歳児と 9 歳児の表現に、ほとんど差が見られないことから、幼児期・小学校低学年期にはそれほど、明確な差が見られないということが分かる。

図１　たいこの音

逆に同様な感じ方で楽しむ機会が設けやすいのではないかと考えられる。

④【秋の葉っぱ】に寄せる表現

園児・小学生が集めた葉っぱを模造紙に貼り、諸感覚の言葉を集めてみた。結果は、

＜視覚＞　色、形、大きさに対して他の物の名称を使う（～みたい、～のような等）

＜聴覚＞　音をオノマトペを使って表現している（ギザギザ、ぱりぱり、しゅっしゅ）

＜臭覚＞　経験をもとにした表現（フルーツの臭い、せっけんみたい）

といった特徴が見られた。同じような生活体験から生まれ出る比喩表現やオノマトペ表現。そのような共有感覚を大切にしていく重要性が確認できた。

☆エクササイズ☆（実際に表現してみよう）

1　諸感覚でとらえた水（温度にも着目）を描いてみよう。

2　手触り、臭い、音、味について１で描いた絵に吹き出しをつけて表現してみよう。

※グループ内で共有する予定であったが、参加者からの要望により、他のグループの参加者ともシェアすることとなり、多くの人たちの表現に触れ、感想を言い合うことができた。

⑤【これから期待すること】講師より

・諸感覚における体験知の重要性をもう一度確認してほしい。

・いろいろな諸感覚が複合されることで、よい効果が生まれるので、常に多感覚のコミュニケーションを意識しながらの働きかけを意識してほしい。

・環境構成の重要性を意識し、諸感覚の何が働いているのか？を考えながら工夫していく。また、知らないことを提供することも大事であるが、知っていることが確認できるような提供も必要であるということを大切にしてほしい。

(2) 研修後のアンケートから　（参加人数　58 人）

○理解できたか　　肯定的回答率　約 95%

○知識の獲得はあったか　　肯定的回答率　約 95%

○活用できるか　　肯定的回答率　約 93%

○感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕

・子ども同士の主体性を育むには、話し合いの中に教師も入り込み、モデルを見せることが大切で、言葉かけ、比べたり、教えたり、順を考えさせたり、様々なバリエーションも必要だと感じた（小)。

・諸感覚をフルに活用し、対象物を見てどう捉え、自分なりにどう表現していくのか、エクササイズで楽しみながら学んだ。そして、その表現を一人一人認め合い、次にどうつなげていくかを保育者と子どもとで話し合う経験を繰り返すことが、子どもたちの育ちに影響すると感じた。

・諸感覚についての話から幼児期学童期の話を聞いたのは新鮮だった。水の表現など経験のないワークでその難しさ、面白さを実感できた。また、自分自身が描くときも実体験に密に関わっていることからイメージが膨らんできたので、子ども達も一緒なんだろうなと感じ、幼児期の体験の大切さを改めて実感した。